

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 言語学から考えるテキスト学

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2011-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八杉, 佳穂 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/4370">http://hdl.handle.net/10502/4370</a>

# 言語学から考えるテキスト学

八杉佳穂

## 1 言語学とテキスト

言語学でテキストといえは、テキストを作り出す場合と既存のテキストを分析する場合の二つが考えられる。

テキストを作り出す場合とは、文字をもつ社会では、当然のことながら、我々が日常やっているように、教育を受けたものが習い覚えた文字を用いて作り出す場合が想定されるが、この場合、テキストを作り出すことが言語学の対象になることはほとんどない。もちろん文字をすでもっている社会においても、いったんテキストが作りだされると、それを研究の材料とすることはある。また、たとえば、新聞や小説などのテキストをコーパスとしてコンピュータによって分析して、辞書の作成に役立たせることなども、言語学の仕事の一つである。しかしここでは、日常的に文字を自由に扱っている文字社会のテキストではなく、日常文字を用いない社会におけるテキストが研究の主対象となる場合を想定する。つまりテキストを作る場合で言語学の対象となるのは、ふつう文字をもたない社会である。文字をもたない社会といっても、現代社会においては、支配言語が必ず存在する。ラテンアメリカを例にとれば、たかさんのインディヘナ（先住民）言語が存在するが、スペイン語やポルトガル語などの支配言語があり、そうした国家のなかで、インディヘナ言語は話されている。テキストを作る場合、そうした支配言語の文字をどのように利用するか、またはまったく違った体系の文字を採用するか、といった問題も含め、どのようにテキストを創出するか、つま

り表記法をどうするかということを考察する。

既存のテキストを分析する場合、もちろん作りだす作業を行ったことで出来あがった現代のテキストもあるが、す  
でにあるテキスト、おもに歴史的な文書を対象とする。

この二つの場合を私の関心の深いフィールドである中米の言語、特にマヤの言語を材料にして考えてみることにす  
る。

## 2 テキストを生みだす作業

テキストを作ることは言語学の主なる役目の一つであり、記述言語学の基礎となるものである。テキストは調査の  
目的に添った記述の仕方、たとえば、音韻を知るために単語を聞いて調査するとか、受け身とか疑問文の作り方を知  
るために適切と思われる文を尋ねて出して出来るテキストが考えられる。そうした単語や文法を知るためにはふつう  
調査票を利用する。調査票には、『アジア・アフリカ言語調査票』（東京外国語大学 一九六六―六七）や *Lingua*  
*Descriptive Studies: Questionnaire* (1977) (*Lingua* 42: 1-72)、夏期言語協会 (Summer Institute of Linguistics) の提  
供する言語調査ソフト *Toolbox* などがある(図1)。また既存の文法書や調査票を利用して独自に質問票を作ること  
もある。しかしながら、単語の意味を知るためには、単に調査票で質問しただけでは不十分であり、使われる場面や  
文脈を知らなければならぬ。また、その言語の文法を書き記す場合においても、既存の知識を超えた文法をもつ言  
語がたくさんあり、既存の調査票だけでは漏れこぼれる現象が出てくる恐れが多分にある。そうした欠陥を補うため  
には、自然な流れの話を記述したテキストが必要となる。ある語が主題となったり、強調されたりすると、通常とは  
異なる表現がされることが起こるため、話の流れに沿ったテキストが必要不可欠となる。分析対象の文の前後関係を  
知らなければ、適切な意味が得られないし、機能も理解することが不十分となるからである。

記述のためには、記述に適した文字を生みだす必要がある。まず基礎語彙 (スワデッシュ [M. Swadesh]) が作成した

0001	あたま (頭); head; tête	A 1.571
0002	かみ (髪, かみのけ(髪)の毛); hair; cheveux(x)	A 1.575
0003	ひたい (額); forehead; front	B 1.571
0004	まゆ(眉), まゆげ(眉毛); eyebrow; sourcil	B 1.575
0005	め(目); eye; œil, yeux	A 1.571

図1 「アジア・アフリカ言語調査票」の一部  
(東京外国語大学 1966より)

ならない。そのためには、まず仮に表記法を定めておいて、十分前後の音結合を調査する必要がある。そして先のような誤読を生みだす場合が生じたなら、tʃのような表記に変えるようにしなければならない。

b, d, gなどの文字は、ふつう濁音(有声音)のために使われる。清音と濁音の対立が英語や日本語にあるので、当たり前のことと思ってしまう、濁音を表すb, d, gなどの文字を、そのためにだけ使おうとする。しかしマヤ諸語のように、閉鎖音系列では、清音と声門閉鎖音の対立をもち、有声音のない言語がある。すなわち清濁の区別がない。そのため、清音と声

一〇〇語、二五〇語の基礎語彙があるが、それだけでは足りない)を調査して、語を区別する最小単位である音素を確定する。そしてそれらをどのように表記するか決める。ふつうはアルファベットを使う。一音一字がふさわしいが、二六文字では表現できない音をもつ言語がたくさんある。その場合、言語学特有の音声文字を使う場合と、既存のアルファベットを組み合わせて音素にあたる文字を作り出す場合が想定される。ふつうは後者である。現代はコンピュータが発達しているため、当然のことながら、コンピュータのキーボードにあるアルファベットを利用しようとする。コンピュータを利用して記述するには、キーボード上のアルファベットを、言語の音素に対応するようにしなければならない。ところが、音素はアルファベットに一对一で対応するとは限らない。そのためいくつかの音素はアルファベットを組み合わせて表すことになる。その際注意しなければならないことが、たとえば「つ」の音は、音声記号ではtʃと書くが、我々日本人はふつうそれをtとsを使ってtsuで表す。しかしこれでは、たとえば「た」の場合、カッパルではなく、カッタルとも読まれる可能性がある。このような誤った解釈を生みだす表記法は避けなければならない。

門閉鎖音の区別を、たとえば、t/d、k/gを使って表すと経済的である。しかし、声門閉鎖音をda、gaと書く  
と、既成観念が災いして、どうしても「ダ」、「ガ」と読んでしまい、表そうとした音とは異なる音を想定してしま  
がちである。そうした危険性をさけるため、bやkを使い、せつかくあるdやgを使うことはない。だからといって、  
bやkと書いても、その音価を知らなければ、読めるわけではない。キーボードの制限と我々の既成観念がたえず文  
字の選択に影響を与えるわけである。なるべく一音素には一文字を使いたいところであるが、このような制限がある  
ため、どうしても一音素に一文字以上を使って表さなければならぬことになる。

中米諸語の場合では、支配言語がスペイン語であるので、スペイン語の書記法を参照にして作るのが賢明である。  
実際一九七〇年頃まで、スペイン語の読み書きの助けになるように、インディヘナ諸言語もスペイン語の表記法に準  
じた書き方がされてきた。そのもっとも大きな特徴は、カキクケコにca、qui、cu、que、coというスペイン語式の表記  
を用いることであった。しかし状況が変わり、それは支配を象徴する書き方とみなされ、スペイン語の非体系的な表  
記法を体系的な表記にかえるばかりでなく、支配のくびきから逃れることを象徴的に表すためにka、ki、ku、ke、ko  
という表記法を使うようになった。政治的状況が文字の選択に影響を与える例である。

現在では、すでに表記法がある程度まで定まっている場合がほとんどであり、先にみたような文字の選択から始め  
ることは少なくなった。しかしそうした音声文字を組み合わせて意味ある単位である単語をどのように表すか、すな  
わちどこでスペースを空けて区切るかは、簡単に解決がつかない場合が多い。

音声文字を使うと、どうしても分ち書きをしなければならない。その際、どこで区切るか。特に問題になるのが、  
主語や目的語、所有を表す人称詞を動詞や名詞にくっつけるか離すかということであり、判断に悩むことが多い。さ  
らにその他の不変化詞(前置詞や時相詞など)をつけたり離したりする基準をどのようにするかということも問題に  
なる。たとえば、ユカテコ語では、慣習的に、主語や所有を表す人称詞を動詞や名詞につけず、離して書いてきた。唯  
一母音で始まる語幹の場合のみ、わたり母音のwあるいはyをつけることが多かった。古典ユカテコ語から例を引  
てみよう。

in yun 「私の父」 a yun 「君の父」 u yun 「彼の父」

(in) wok 「私の足」 a wok 「君の足」 (u) yok 「彼の足」 (Coronel 1998 [1620])

さまざまな文献から引用する場合、表記の統一をはかる必要があるが、その配慮がないテキストが多い。表記を統一しない場合は、原典を尊重しているのであるが、表記についての注釈を入れる必要がある。そこで、ここに表記についての注釈を加える。引用した表記法は古典表記を現代表記に改めている。ここではvあるいはuをw、cをkに変換している。

現在グアテマラでは、「マヤ言語アカデミー」が組織され、言語グループごとに支部があり、それぞれの言語グループの主体性が重んじられている。「マヤ言語アカデミー」では、ユカテコ語の場合と異なり、人称は語幹につけて書くようにしている。

xukamsaj ri nutzi:ri a Xwaan 「フアンは私の犬を殺した」(キチエ語)

「私の犬」は nu tzi:riではなく、nutzi:riとくっつけて書く。xukamsajはx-u-kamsah(完全相—それを—彼は—殺す)と分析でき、これだけで一文となる動詞句である。øはri nutzi:ri(その私の犬)に対応する目的語標識(ゼロ標識)であり、uはa Xwaan(男性標示 フアン)に対応する主語標識である。

そうすると、動詞句という、語より大きな単位をひとまとまりにして、分かち書きをしていることになる。ところが句単位でひとまとめにした基準で統一されていないわけではない。前置詞句では、前置詞にあたる語と、その後にくく名詞は、離して書かれる。

xpe ruuk' le wachil' 「彼は私の友達と来た」(キチエ語)

xatwil iwuir pa k'ayb'al 「昨日私は市場であなたを見た」(キチエ語)

r-uuk' 「彼ともた」、pa「で」は前置詞の機能を果たす。その後名詞が生起して前置詞句になっている。ちなみに x-~~pe~~, x-at-wil は動詞句である。

このように、マヤの言語は英語をはじめヨーロッパ諸語で親しんできたアルファベットの分かち書きの常識とは異なる書き方となっている。語にいろいろな接辞がついて一語のように発音されるマヤ諸語のような抱合言語では当然あってよい措置ではある。英語のように分析的な言語とは異なるのであるから、基準が異なって当然である。しかし句レベルで見ると、動詞句ではつけて書き、前置詞句では離して書いており、不統一の感は免れない。

日本語の場合、句読点があるだけで、分かち書きをしない。その代わりに漢字仮名交じり文という独特の表記法を確立した。句の始まりのほとんどに漢字が立つので、文の認識が容易である。西洋の基準からすると、語の分析ができていない表記法ということになるかもしれないが、十分機能している表記法であり、なにも西洋の基準で物事をはかる必要などない。

語レベルでの分かち書きという習慣に縛られているので、どこで分かち書きするか悩むことがしばしばであるが、さらに、規範ということが問題になる。たとえば、ユカテコ語の場合、語の最後の「ya」がしばしば発音されない。しかしそのあとに、たとえば o.o. や「」などがつくると、現れる。そこでその場合、語形を naka や malo ではなく nākal や mālob' としたほうがよいという規範意識がはたらく。

nāka > nākal'oob' 「彼らが昇ること」

mā'alo > mā'alob'r' 「彼はよす」

語彙の例を挙げただけだが、このように語彙や文法を書く場合はもちろんのこと、テキスト自体に、規範意識が入りこむ余地があることを十分認識しなければならない。

現代ではある種の規則を設けて、それに準じて書く。書記は慣用の賜物であり、それに慣れれば、たとえば先ほど挙げた句レベルの不統一など、何の問題もない。しかし以前は、そうした決まりはかなり緩やかであった。だからテキストを分析する時、まず形態素の同定から始めなければならない。それは次節で問題にしよう。

### 3 テキストの分析

テキストは何も紙に書かれているものに限定されない。最近ではカセットやメモリーカードに保存されたものや、ビデオに録画されたものもテキストの一形態といえるであろう。しかしここでは、文字テキストを対象を限ることにする。そうはいっても、テキストを生成する場合、そうした電子機器の利用はもはや当たり前である。

テキストといって、ふつう我々が思い描くものは、手書きのまとまった文字資料であろう。手書きの資料でも、原本ではなく、写字生による写しがある。藤原定家のような、写字生とは言いがたい人の、かなり変換を施した写しもありうる。そうしたものも、利用目的によつて、貴重な資料となりうる。テキストとして、もちろん印刷物を思い描く人もいるであろうが、推敲の度合い、客観の度合いが異なるように思われる。

すでに表記法をもっている言語では、当然のことながら、テキストが生みだされているはずである。それらのテキストを使って何をするか。民族学者であれば、たとえば神話や伝説、手紙などの既存の資料を、文化を理解する手段として利用するであろう。言語学者であれば、それを分析して文法書を書くであろう。ここでは、マヤのテキストを利用して言語学では何を考えるかを示してみよう。

マヤのテキストは、スペイン人による征服以前のマヤ文字で書かれた資料と、征服期以後のアルファベットを利用して書かれたものの二種類に大きく分けることができる。



一六世紀以前には、石碑や祭壇やリンテル(まぐさ)、骨、土器、壁画、絵文書などに文字がみられる。テキストとしては、おもに石に刻まれたものと、壁画や土器、絵文書などの壁面や紙面に描かれたものに分けることができる。石に刻まれたテキストの場合、石に石でもって文字を刻んでいくのであるから、印刷以上に慎重に推敲した文を刻んだはずである。ところがそれでも間違いが散見される。マヤのテキストはおよそ三分の一が暦の文字である。暦は計算して求めることができる。計算して導かれた暦の文字が書かれているはずである。ところがたまに間違った暦の文字が書かれていることがある。そのさい単純な間違いとはみず、何らかのメッセージが込められているのではないかと考えるのが健全な見方であろう。すなわちテキストを絶対的に正しいものと仮定する。とはいえ、いろいろ考えをめぐらしてもどうしても理由がない場合は、やはり書き間違いとみなす以外にない。暦以外の文字の場合は、たとえ同じ人物を表す文字があっても、一つとして同じ形はない。マヤ文字のテキストでは、同じ文字を繰り返すことを避ける美意識が働いていた。そのため、書き方を変えた文字とみなす以外にない。しかし暦に間違いが散見される以上、暦以外のそうした文字にも間違いがある可能性は否定できない。

一六世紀以後は、もっぱら修道士に教わったアルファベットを使用して、紙に書いたものがテキストである。ここで取りあげるユカテコ語のテキストとしては、「チラム・パラムの書」と年代記が有名であるが、その他遺言書や土地文書、嘆願書、選挙記録、罪状記録、教会関連文書などがある。それらは、一六四〇年以降増大し、一七七〇年から一八二〇年が最盛期となる。そして一八五〇年代に公証書が書かれたのち、書記記録は衰退する。現存する文書は全部で一七〇〇ほどあり、そのうち約半分が遺言書という(Reisigl 1996: 11)。

ユカテコ語の代表的なテキストである「チラム・パラムの書」とは、メキシコ、ユカタン半島のチュマイエルやティンミンなどの村に保存されていたテキストの総称であるが、『チュマイエルのチラム・パラムの書』等現在九つが確認されている。それらの文書には、マヤ暦にもとづく歴史や占い、神話、薬草を使う医療、なぞなど口頭伝承されてきたもののほか、スペインの文書から翻訳された暦や医療、「テオドラ」(アラビアンナイトのタワドッドの章)などが、明確な区分なく、またほとんど何の前後関係もなく、ばらばらに取り入れられている。そのため、村に保存

されていた雑多な文書を単に集めただけのようにみえる。

こうしたテクストをどのように扱うべきか。神聖で侵さざるものとみるべきか、それとも間違いを含んだ、無条件に信じてはいけないものとみるべきか、目的によっていろいろであろう。しかし言語学的にテクストを分析する場合、内容の真贋は別問題であり、書かれたものが文法的に正しいものと仮定して分析していく。間違いが含まれていると最初から思っていると、思わぬ落とし穴にはまる。たとえば、古典ユカテコ語には、通常の活用と異なる活用形がある。その活用形は、主語と目的語以外の要素が、動詞の前に生起するときに現れるが、現代ユカテコ語ではほとんど失われている。テクストに間違いがあることを前提にすると、このようなすぐさま理解できないおかしな形の文に出会うと、それは間違いと判断してしまふ。その例を挙げてみよう。

ユカテコ語の主要な辞書を網羅した『コルデメックス辞典』（一九八〇年）は、現在最高の辞書として利用されている。一六世紀から現代の間に、ユカテコ語は大きな変化を経験しているが、辞書の編者は現代マヤ人であり、そのため、その人たちに理解できない文が当然のことながらありうる。ふつうなら原典を重んじて、現代にない形であっても挙げていく。ところが、編者が理解できないため、そうした文を現代的に変えてしまったものが発見された（Yasugi 2005: 83）。

machbil in kab in talic vaye (*Diccionario de San Francisco* 一七世紀中葉、原典のまま)

捕まいて 私の手 私来た こい

machbil in k'ab taliken waye (*Cordemex* 1980)

「手を捕まえられて、私はここに来た」

『コルデメックス辞典』では、cをk、kをk'、vをwに変えている。それは現代的な表記である。ところが『talic (私は来た)』という現代では使われない言い方を、taliken (私は来た) という現代に使われる形に変えた。こ

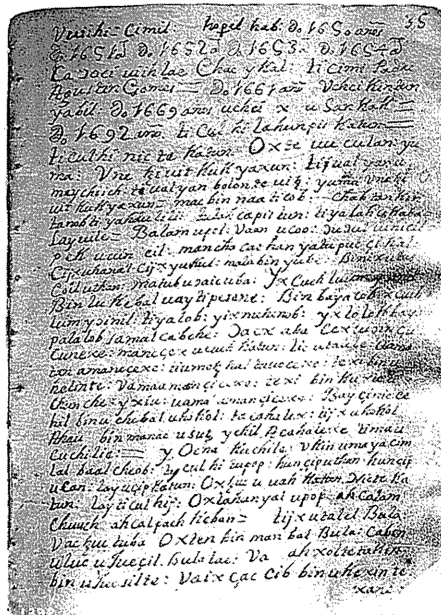


図2 『チュマイエルのチラム・パラムの書』64頁

れはテキストの改変である。

もつともひどい改変は、エドモンソンによる「チラム・パラムの書」の翻訳にみられる (Edmonson 1982, 1986)。彼は独自の理論にもとづき、テキストにあるマヤ暦をグレゴリウス暦に変換し、それに合わせてテキストを入れ替えた。例えば、『チュマイエルのチラム・パラムの書』の最初の五頁をみると、原典の一、二頁はエドモンソン版では一五章、三〇五頁は一二章であり、逆に、氏の第一章は原典の七四頁と、原典の頁を彼独自の章立てに従って大幅に入れ替えている。さらに悪いことに、彼の翻訳は、単語の意味と対句をもとにしたものであり、ほとんど

ど文法を考慮していない (cf. Hanks 1988)。たとえば、确实未来の *one* を名詞形や過去分詞形に訳したり、間接構成素を前置する動詞活用をまったく無視しており、よくもこのような翻訳本がまかり通るものだという感を抱かざるをえない。こうしたことが起こらないよう、原典テキストはあくまで尊重すべきである。

しかしながら、原典テキストから、たとえば医療関係の文章だけを抜粋して編集したり、土地文書だけを集めた本がある(たとえば、Rovs 1931, 1939)。編者の意図的なテーマに沿って作ったテキストは、いかにも西洋的というべきか、近代的なテキスト作りといってもいいかもしれない。

ここで、ユカテコ語のオリジナルなテキストの例をみてみよう。図2は『チュマイエルのチラム・パラムの書』の六四頁である。文章のつながり具合から、まったく異なる内容の章が六行目中ほどから始まったと考えられる。ふつう扱う内容が異なると、一行開けたり、線を引いたりして、前と区別するであろう。しかしここでは、六行目までの

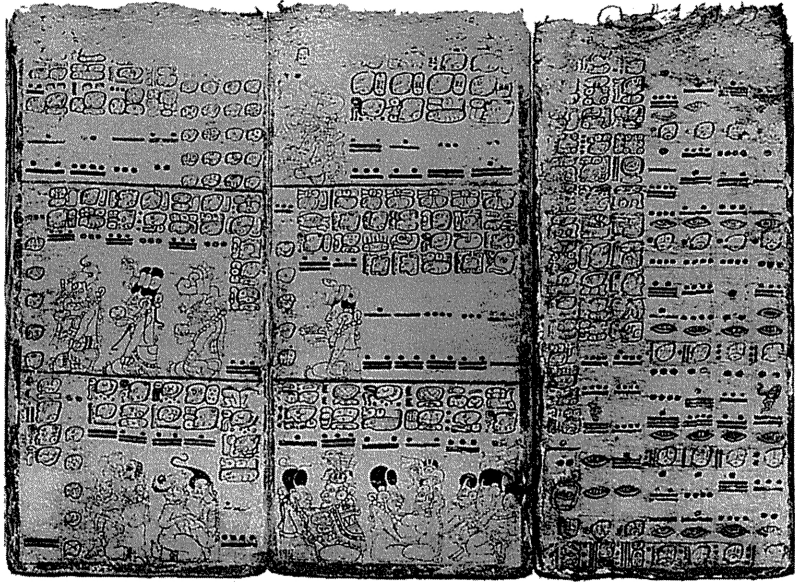


図3 『ドレスデン絵文書』。左から22-24頁。22、23頁は3段に分かれ、それぞれ260日曆にもとづく占いの異なるテキストであるが、24頁は金星曆を扱う。

字間が、それ以後の行と異なっているだけである  
(図2)。

我々の感覚では、章立てしたり、小見出しをつけたりする。そうしたものがユカテコ語のテキストには一切ない。章立てやスペースを空けることをしないのは、貴重な紙を節約するためであろうか。そういう可能性も否定できないが、おそらく、テキストを読む人が、そのテキストをよく知っている人に限られていたからにちがいない。我々がテキストを生成する場合、まったく知らない人を相手にすることが多い。だから論理的に筋道を立ててテキストを作る努力をする。段落をきつたり、章に分けたり、小見出しをつけるのは、テキストの内容を知らない人に向けてやる作業である。ところが手書きの、あまり公的な意識のないテキストの場合、そのような必要はない。読めばわかるような内容だから、読みやすいように工夫する必要はない。せいぜい、行空けをしたり、線を引いたりするだけで十分である。

征服期以前に書かれ、現存する四つのマヤの絵文書も、章立てや類似内容のものをまとめて記すといったことがなく、我々の感覚からすると、雑多なも

のが入り混じっているように思われる(図3)。

これらをテキスト学という観点から考えると、スペイン人による征服以前の一二世紀から一五世紀の間に作られた絵文書と、征服後かなりたった一八、一九世紀に写された「チラム・バラムの書」の兩者には、共通する雑多性がみられることに気づく。それゆえ、それは受け継がれてきた伝統といえそうである。

そうした文書を西洋人や我々が扱うと、章立てしたり、類似テーマのものを集めたり、類似章を比較して再構成したりして、首尾一貫したテーマに沿った本づくりをすることになる。この大きな違いは、本に対する考え方や論旨の展開の仕方の違いによるものであろうが、これをさらに文明の型の違いが反映したものであるというのはいきすぎであらうか。

手書きのテキストの場合、もちろん意味ある単位である単語ごとに区切ることが多いのであるが、単語を区切るのではなく、音節的な書き方がされる場合も結構多い。おそらく読む区切りのほうが優先されるためであろう。そのため意味的にまとまった区切りとは異なる区切りがされることになる。そうすると、テキストの分析には、形態素的な区切りを改めてやる必要が生じる。一例を挙げてみよう(図2、一〇―一一行)。

mac bin naa ti cob: ch'ab tan kin / ta nob ti yahau li li: tulah capis tun (テキスト)

mac bin naat'ic-ob ch'abtan kintan-ob ti y'ahau-lil-i-tu lahca-pis tun (形態素で区切った分析)

「だが、一二年目に支配のためには苦行しなければならぬことを理解するだろうか。」

たとえば、naticob は、音節的に naa ti cob と区切られているが、その区切りに従うと、意味をなさない。テキストを理解するには naticob のように区切り方を改めなければならない。

既存のテキストはさまざまであり、いろいろ異なる目的に添って利用される。テキストには必ずしもオリジナルな話ばかりが記されているわけではなく、異なる文化で伝えられてきた話を翻案して記した場合もある。その場合、オ

リジナルは何かを同定する必要がある。どこから伝えられたかにより、文化の流れが同定できるし、どの部分が変わったか、どの部分がとられ、どの部分が省かれたかを知ること、受容の違いが判明する。その文化にとって重要と思われることは取り入れられ、必要でないと思われるところは当然のことながら省かれるからである。たとえば、『カワのチラム・バラムの書』では、中世の曆書レポルトリオ (reportorio) から、テオドラ物語、天体の規則の説明、医療や治療を支配する一二宮、人間の性質に及ぼす天体の影響、宇宙の創造など、占星学情報の多くが採られた (Hirons 2004: 75)。そこからマヤ人が興味をもっていたのは何かがわかるわけである。

テキストの研究の視点はさまざまである。テキストそのものの分析というのは、ふつう行う研究である。しかし、雑多なテーマの寄せ集めとみていた「チラム・バラムの書」が、実は伝統的な本作りに則ったものであり、章立てや小見出しなどは、読まれるための近代的な工夫であることに気づいたのは、テキスト学とは何かを考えている過程でわかったものである。テキストにまつわるさまざまな事象に特化した研究は、未開拓の分野に違いない。

#### 参考文献

- Barrera Vásquez, Alfredo (ed.) 1980. *Diccionario Maya Cordemex*. Mérida, Yucatán: Ediciones Cordemex.
- Coronel, Juan. 1998 [1620]. *Arte en lengua de Maya*, ed. René Acuña. México: Universidad Nacional Autónoma de México.
- Edmanson, Munro. 1982. *The Ancient Future of the Itza: The Book of Chilam Balam of Tizimin*. Austin: University of Texas Press.
- . 1986. *Heaven Born Merida and Its Destiny: The Book of Chilam Balam of Chumayel*. Austin: University of Texas Press.
- Gordon, G. B. 1913. *The Book of Chilam Balam of Chumayel*. Philadelphia: University of Pennsylvania.

- Hanks, William F. 1988. "Notes and Reviews: Grammar, Style, and Meaning in a Maya Manuscript." *International Journal of American Linguistics* 54: 331-369.
- Hirons, Amy George. 2004. "The Discourse of Translation in Culture Contact: 'The Story of Suhuy Teodora,' An Analysis of European Literary Borrowings in the Books of Ch'lam Balam." Ph. D. dissertation, Tulane University.
- Restall, Matthew. 1995. *Life and Death in a Maya Community: The Itz'i Testaments of the 1760s*. Lancaster, CA: Labyrinthos.
- Roy, Ralph L. 1931. *The Ethno-Botany of the Maya*. New Orleans: Middle American Research Institute, Tulane University.
- . 1939. *The Tiles of Ebtan*. Washington D. C.: Carnegie Institution of Washington.
- Yasugi, Yoshiho. 2005. "Fronting of Nondirect Arguments and Adverbial Focus Marking on the Verb in Classical Yucatec." *International Journal of American Linguistics* 71: 56–86.